

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



特集 I Have a Dream

巻頭エッセイ

話す内容があれば英語は話せる 池上 彰 01

特集 対談：キング牧師とスピーチ — ことばの力 — 森住 衛／鈴木 健 02
“I Have a Dream”で「読む」力をつける 梶田留美 10
“I Have a Dream”を通して子どもたちに伝えたい思い 桑山 洋 12
“I Have a Dream”ブックレビュー — M.L.キングを縦横に知る！ — … 室井美稚子 14

連載 評価クリニック ライティングの採点方法から見た指導と評価 根岸雅史 16
授業レポート 本文の読解から自己表現へ(1) — 行間を問う — 立川研一 18
小学校英語 Just Now
豊かなコミュニケーション能力を育てる英語活動の実践 岡本博子／清水麻未 21
英語教師のリソース
DVDを活用しよう — キング牧師、公民権運動、非暴力の心 — 田嶋美砂子 23
AROUND THE WORLD フランス：ことばと文化[2] 町田 健 表紙裏
表紙写真について 地球を体感する旅 高橋貞雄 表紙

Vol.16

FALL 2009
SANSEIDO

フランス語の由来

「フランス」という名前は、ゲルマン民族の「フランク族」に由来しています。彼らは、紀元5世紀頃に現在のフランスを中心とする地域に侵入して「フランク王国」を築きました。ただ、国名とは違い、フランス語の起源は、ローマの言語だったラテン語です。

もともとこの地域はローマ人によって「ガリア」と呼ばれており、ラテン語とは歴史的に近い関係にあるケルト語の一派ガリア語を話す民族が居住する地域でした。このため、中世になっても、フランス語のことをラテン語では「ガリア語」と呼び続けていたくらいです。紀元前1世紀に、カエサルがガリア北部を征服したことで、程なくしてラテン語がガリア全土で話されるようになります。ローマ帝国が地中海世界にその勢力を保持している間は、ラテン語は帝国内でほぼ均質的な言語として機能していました。ところが、5世紀に西ローマ帝国が滅亡すると、各地のラテン語は急速に独立した変化を遂げるようになり、恐らく6世紀から7世紀には、フランス語、オック語、イタリア語、スペイン語などのロマンス諸語が成立していたものと思われます。

ガリアのラテン語は、いくらかはガリア語の影響を受けていたようです。ただ、ガリア語がどんな言語だったのかはほとんど知られていないので、影響がどんなものだったのかは正確には分かりません。ラテン語で [u] と発音されていた音が [y] という発音記号で表される音

に変化したり、数字の80を「4×20」という形で表すような例が、ガリア語の影響なのではないかと推測されている程度です。

「ガリア語なまり」のラテン語がもとになってフランス語が出来上がろうとした時期に、征服者としてやってきたのがフランク人です。フランク人たちが話していたのは、ゲルマン語の一種フランク語でした。フランク人たちは、ガリアのローマ人たちに対しては支配者だったものの、人口が少ない上に文化も遅れていたことから、自分たちのフランク語を捨てて、ガリアのラテン語を話すようになります。しかし、まさに新しく変わろうとしていたガリアのラテン語に、フランク語が影響を与えないことはありませんでした。戦闘用語のような語彙、ラテン語ではなくなっていた [h] の音の復活などが、フランク語の影響だと言われています。

こうしてようやく、7世紀頃には、ラテン語とも周辺の諸言語とも異なる、独立した言語としてのフランス語が成立することになります。フランス語という1個の言語が生まれるには、大本のラテン語だけでなく、ガリア語とフランク語という、同じインド・ヨーロッパ語族に属しながらも異なる言語が関わっているのです。近代では洗練された文化語として羨望的となるフランス語と言えども、その揺籃期には、ローマ文化を吸収する立場にある言語からの決定的な関与を受けていたわけです。

表紙写真
について

地球を体感する旅

高橋貞雄 Takahashi Sadao (玉川大学)

日本でもよく知られている「すばる望遠鏡」は、一般にはすばる天文台とも呼ばれているが(正式名「国立天文台ハワイ観測所」)、ハワイ島のマウナケア山(標高4,205m)の山頂付近に立っている。

ハワイ島は日本との縁が強く、今なお日本の名残が島のあちこちに色濃く残っている。私はそうした日本文化の足跡を辿りつつ、この機会にすばる望遠鏡をこの目で見ておきたいとかねがね思っていた。私はまだ日本の最高峰である富士山にも登ったことがないので、マウナケア山への登頂は文字通り未知への挑戦であった。

山頂までは四輪駆動車でガタガタと埃を巻き上げながら向かった。しかし、車で行くとはいえ、直接山頂まで行くと高山病になる心配があった。そのため、登頂の途中の「オニツカセンター」(標高2,800m)でしばらく休養し、1時間ほど体を高度に慣らす必要があった。センターには、1986年にスペースシャトル・チャレンジャー号の爆発事故で亡くなったハワイ島出身の日系宇宙飛行士・鬼塚承次氏の胸像があり、感慨を深くした。

太陽が西の彼方に傾きかけたころ、やっと天文台の近くにたどり着いた。頂上付近はとにかく寒



かったが、そこから夕日に染まる地平線を眺めていると、地球が回転していることを肌で実感することができた。この地球は何なのか、そして自分は何なのか、とことばなく想う数分間であった。夕日が沈んでからしばらくして、標高4,000m付近まで戻り、今度は満点の星空を観察した。ガイドの方がレーザーを照らして説明してくれると、光がその星まで届くようにも見えた。今回の旅を通して、地球と宇宙を体感し、そして自分が生きていることを感じ取ることができた。



話す内容があれば英語は話せる

池上 彰 Ikegami Akira

私は英語が話せない。ずっとそう思っていました。学校の英語の試験では、それなりの成績がとれたのに、英米人を前にすると、会話が續かない。これは「英語が話せない」からだと思っていたのです。

ところが、この固定観念を打ち破るような出来事がありました。私がNHKの「週刊こどもニュース」を担当していたときのことで。出演者の中学生の男女が、外国人観光客に街頭インタビューするという企画でした。

男の子は、頭の中で一生懸命に和文英訳をした上で話しかけますが、相手から答えが返ってきたら、それでおしまい。会話が續きません。なんだか私の若い頃の姿を見るようでした。

ところが女の子は、前もって文章を作ろうとしません。男の子が、「えーと、May I ask ... えーと」とやっている間に、にっこり笑って、「インタビュー、OK?」と相手に迫ります。「きちんとした」英語の文のやりとりにはなりません。知っている英単語を並べて、にっこり笑うだけで、会話が成立してしまっただけです。

うーむ、これぞコミュニケーションの極意かもしれないと、私は感心しました。

と同時に、あることに気づきました。それは、自分が英語を話せないと思っていたのは、そもそも話すべき内容を持っていなかったからではないか、ということでした。

英米人（あるいは英語を話せる外国人）と会話するとき、「How do you do?」と話しかけることはできても、挨拶が終わったら、それっきり。そのあとが續かないのは、話したいと思う内容を持っていなかったからです。

どうしても相手から話を引き出す必要に追い込まれますと、英語が口から出てくるのです。今から4年前、スロバキアに取材に行ったときのことで。かつてのソ連軍によるチェコスロバキア侵入の歴史的事件に関してスロバキアの学者の見解を聞くことができました。せっかくのチャンスですから、知っている英単語を並べ、必死になって質問します。すると不思議。会話が成立してしまうのです。あれっ、自分は英語ができるじゃん、と思ったものです。

去年のクリスマス、以前に中東取材でインタビューしたヨルダン人の研究者が来日。一緒に食事することになりました。彼はイスラム教徒です。京都見物から帰ってきた彼と東京都内で食事したのですが、「日本人の多くは仏教徒だと京都で説明を受けたが、なぜこんなにクリスマスを祝うのだ?」と質問攻めです。

この分野なら、質問は想定内。いくらでも答えられました。日本ではクリスマスが商業化していること、仏教が考える来世、日本人の宗教観など、会話がはずみました。

話すべき内容があれば、会話は成り立ちます。学校英語で基礎は十分。あとは話す中身を獲得することなのです。もっとも、頭を絞っての必死の会話になって、何を食べたか思い出せないのですが…。

いけがみ あきら

1950年生まれ。ジャーナリスト。1973年、NHKに記者として入局。事件、災害、教育問題等を取材。1994年から11年間、「週刊こどもニュース」の「お父さん」。2005年に独立。主な著書に『そうだったのか! アメリカ』（集英社）、『わかりやすく「伝える」技術』（講談社）。

対談：キング牧師とスピーチ

— ことばの力 —

森住 衛 (桜美林大学)

鈴木 健 (明治大学)

1. はじめに

森住 *NEW CROWN* (以下、*NC*) は、1978 (昭和 53) 年の初版以来、3 大理念というものを掲げております。すなわち、「ことばの教育」、「異文化理解教育」、「人間教育」です。この 3 つは、その後の版によって、時代によって、言い方の順序や強調の仕方は違いますが、*NC* がいわば堅持してきた理念です。今日は、同じく *NC* が伝統的に扱ってきた、キング牧師についての課 “I Have a Dream” を素材にして、特に、「人権」、「共生」という題材と「スピーチ」という形式の 2 つの観点から、鈴木先生のご専門の話を伺いながら、この 3 大理念を深めていければと思っています。

鈴木 よろしくお願ひします。今、森住先生が言われた 3 大理念は、とても重要だと思います。私は、コミュニケーション学、特に、「公の場における説得の技法」としてのレトリックを研究してきたのですが、実は、レトリック研究においても、「ことばの教育」、「異文化理解教育」、「人間教育」という概念は、同様に重要です。

まず、「ことばの教育」についてですが、これまで、レトリックについては、あまり一般の人に関心を持たれることがなくて、メディアの人にレトリックの話をしてほしいと頼まれることも皆無でした。しかしながら、オバマ大統領が選挙戦に関わるあたりから、ディベートやオバマ大統領の就任演説を分析してほしいという要望などを含めて、世間での関心も高まってきました。これまで、日本の教育でことばの勉強と言うと、ことばの運用能力ばかりが強調されていて、例えば、会話がうまいなどの、わりと表面的なことばの使い方に終始してきました。しかし

ながら、オバマ大統領の登場で、アメリカでもレトリックの重要性が見直されてきており、それ以上に日本の人たちが、スピーチの魅力やレトリック、ことばが持つ力に興味を持つようになったというのは面白いことだと思います。

次に、「人間教育」に関してです。キング牧師であったり、オバマ大統領であったり、歴史に残る有名なスピーチをした人は、社会とのインタラクションの中で様々な経験をしています。そして、その中から、自分が話すべきこと (what to say) を考えだし、その場その場において、どのように言えば (how to say) 説得力があるかを考えています。また、ことばが発せられることによって、話者と聞き手の間で相互作用が起こり、社会を動かしてきました。そういう意味で、「人間教育」というキーワードは面白いと思います。

最後に、「異文化理解教育」についてです。私たちコミュニケーション学者の研究分野には、大きく分けて 3 つあります。まず「どのように人の知が形成されるか」、それから「どのように意思決定がされるか」、最後に「どのような意思対立が起こっているか」というものです。仲がよいだけがコミュニケーションと勘違いされることが多いのですが、けんかをしたり、「公民権運動」にも見られるように、立場や意見が違う人同士が、ことばを使ってどのように第 3 者を説得するかという意味対立も、実は、重要なコミュニケーションです。これらのことから、今回の対談は非常に面白い企画だと思っています。

森住 コミュニケーションやレトリックに、人間としての苦悩など、人間的な成長がなければだめだというお話ですね。

鈴木 はい。それから、人間は体験というものが

重要です。体験が違えば、同じことを言うのでも、言い方も変わってくるし、言われた方の反応も変わってくるということですね。

森住 体験がなければ、ことばも心に響かないですよ。ましてや、「異文化理解教育」においても、先生がおっしゃるように、単なる啓蒙で終わるようなものではありません。今のお話で、この「異文化理解教育」に加えて、「ことばの教育」、「人間教育」を標榜してきたことは間違いではなかったと、自信を持たせていただいた感じがします。

2. アメリカの公民権運動

森住 さて、キング牧師の公民権運動を題材とした“I Have a Dream”が、初めてNCに登場したのが、1981（昭和56）年度版です。この課は、アメリカ合衆国における、African Americanの人たちの生きる権利を訴えた、わかりやすい人権問題の題材になっていますので、それ以来、NCのいわば十八番のような存在となっています。そこで、この課のような人種差別反対運動を起こした、アメリカ合衆国の公民権運動全般について、どのように考えているかお聞かせください。

鈴木 公民権運動と関連した出来事では、リンカーン大統領が奴隷解放宣言をしたことは、非常に大きなepoch-makingでした。しかしながら、実際には、目に見えない形での差別が行われるなど、あまりその後の状況は変わりませんでした。NCの“I Have a Dream”にも書かれているように、例えば、バスに乗っても黒人は後ろで白人は前に座る、同じレストランに入れない、“For White Only”という看板がいたるところに出ているなどの状況が続いていたんですね。

森住 そのような状況のもとに、キング牧師の“I Have a Dream”が生まれたのですが、この演説の中では先ほど出ましたレトリックの点からいうと、どんな工夫がみられるのでしょうか。

鈴木 キング牧師の“I Have a Dream”のスピーチの中で、有名なものの1つにCheck Metaphor（小切手メタファー）というものがあります。日本ではあまり馴染みがないのですが、アメリカ人と“I Have a Dream”の話をする時、よくCheck

Metaphorの話が出てきます。キング牧師は、奴隷解放宣言がお題のままではだめだと言うために、まず、スピーチの冒頭で、「a great white American（一人の偉大な白人のアメリカ人）が、奴隷解放を行ってくれた」と言います。a great white Americanとは、リンカーン大統領のことを暗示的に言っています。そして、「白人は、黒人に対して換金不可能な『小切手』を渡したんだ。しかしながら、Bank of Justice（公正さという名の銀行）が倒産していると信じるわけにはいかない。Bank of Justiceが『小切手』をきちんと換金しなくては、黒人の地位の向上、公平さの達成というものにはなされないんだ」という話をするんです。1つの比喩を使うことの重要性は、いろいろな含蓄が生まれてくるということです。

また、リンカーン大統領とキング牧師とオバマ大統領の3人には、面白い共通点があります。それまでは無名だった人が、あることをきっかけとして、一躍全国的に知られるようになったということです。

リンカーンの場合は、イリノイ州上院議員選挙の前にダグラスと行った奴隷制をめぐるディベートです。リンカーンは奴隷廃止の立場、ダグラスは、奴隷州については、奴隷制を存続する権利を認めるという立場で、複数のディベートを行いました。そのとき、リンカーンは、上院議員選挙には負けるのですが、奴隷制ディベートがきっかけとなって、一躍、全米中に知られる名士となり、その知名度を利用して、後に大統領に当選したんです。ですから、そのディベートをダグラスと戦っていなければ、リンカーン大統領の登場もなかったし、その後の奴隷解放もなかったのではないかなと思うんです。

同じようなことがキング牧師にもあります。NCの教科書に載っている1955年12月のモンゴメリー州におけるバスボイコット運動です。当時、もし黒人がお金を持っていないばかりだったり、人数が少なかったりすれば、ボイコットをしてもインパクトはなかったと思います。しかしながら、当時の黒人の経済力や人数は、行政やビジネスの世界で無視できない存在感を持っていました。その結果、三百数十日にわたるバスボイコットを無視でき

ず、差別撤廃につながっていったわけですね。当時、26歳の若さにもかかわらず、ボイコット運動のリーダーシップをとったキング牧師が、一躍、注目されるようになって、その後の公民権運動のリーダーになったという点では、歴史の力というものを感じざるをえません。

オバマに関しては、たまたまとても優秀な黒人がいて、コロンビア大学からハーバード大学の法科大学院を出て、大統領になったと考える人もいます。しかし、私は、そこにも歴史の力が働いているように感じます。9.11のあと、人種の融合、あるいは、アメリカ中心ではなく、国際強調体制による世界平和を構築しようとしているときに、歴史の方がオバマという人を必要としたような気がするんです。実は、オバマも、2004年の全国民主党大会で基調演説をするまでは、無名の存在でした。連邦議会の上院議員でさえなく、単にイリノイ州議会の上院議員にすぎなかった。しかしながら、基調演説のときに、自伝のタイトルともなった *audacity of hope* (大胆な希望) ということばを使ったり、*hope* というキーワードを何回も繰り返して、感動的なスピーチを行い、連邦議会の上院議員に当選したのです。当時、オバマは、2012年の大統領選挙に出る予定だったのですが、2004年に注目されてしまったので、4年間前倒しで2008年の大統領選挙にうってでたという経緯があるんです。

リンカーンに関しても、キング牧師に関しても、オバマに関しても、大きなきっかけ、歴史の後押しのようなものがあるという視点から、公民権運動を見ると非常に面白いと思います。

森住 歴史上の偉大な人物とか大きな事件というのは、偶然の産物ではないということですね。



鈴木 健

3. 教材としての異文化

森住 では、次に、中学校英語教科書で教材化するという観点から、お話を伺えればと思います。半世紀前では、ローザ・パークスのバス事件などが、そして、最近では、オバマ大統領の誕生などは、生徒の興味をひきやすい題材ですね。そこで、どのようなものが教材化できそうか、また、教材化する際の観点などについてお聞かせいただけますか。

鈴木 3年前に、1年間フルブライト研究員として南カリフォルニア大学に滞在する機会がありました。その折りに、メンフィスの国立公民権運動博物館に行く機会があり、教材にしたら面白いと思ったものがそこにありました。博物館のパンフレットなんですけれども、歴史の流れが写真入りでわかりやすく説明されているんです。一方、やわらかい内容のものとしては、“Great African American of the 21st Century” という子ども向けのパンフレットも売られていました。このパンフレットには、Whoopi Goldberg など、みんながテレビで見るとような人が載っています。彼ら、彼女らが、実はすごく立派な人で、感動的なことを言っていたりして、それらが紹介されています。日本の場合、かたくいこうとすると、かたくいすぎたり、やわらかくいこうとすると、やわらかくいすぎたりしてしまって、バランスがとれないことがあると思うんです。そういう点は日本も見習いたいと思います。また、大人は、展示物を見て、歴史的な理解ができるのですが、子どもに昔の奴隷船の時代の苦勞の話をして、あまりぴんとこなかったり、かえって劣等感をうえつけてしまうこともあります。しかしながら、いろいろな差別や苦難の歴史はあっても、今、こんなに活躍している人がいるんだというポジティブな動機づけになる点でも、よい教材だと思います。

森住 昔の奴隷の話聞いてもぴんとこないということですが、異文化理解は自分の側に、それも今の時代に、引き寄せて考えないといけないですね。実は、キング牧師の話についても言えることですが、これまで、NCが大事にしてきた題材の取り上げ方として、問題を決して他人事にははいけない、「内なる異文化」の視点でとらえるという発想があり

ます。「外部」の問題を「自分」の問題にすることが異文化理解の本質です。黒人と白人がトイレに行くときに区別されていたとか、水飲み場が colored people と white people で分けられていた話を、遠いアメリカ合衆国の話、古い昔の話にしてはいけないということです。日本にも類似した問題があるのです。NC は内なる人権問題もあるはずだという立場で臨んできました。アイヌの問題を取り上げているのは、この理由です。キング牧師の話ほど極端ではないにしても、これと似たことを、アイヌの人たちに、シサム（「本土」の人たち）がやってきたし、現在も、形を変えて（見えにくい状態で）起こり得ています。つまり、日本の、今の時代にも、人種差別の問題はあるのです。

それから、この種の「人権」や「共生」の問題は、アメリカ合衆国や日本以外にもあります。そのため、例えば、少数先住民族の問題として、ニュージーランドのマオリの問題を取り上げたこともあります。1993（平成5）年度版です。この課の最後では、マオリの人たちのことが英訳で紹介されています。“When my language dies, I die. When my language lives, I live.”という文章ですが、少数言語維持ということばの問題とも関連づけて取り上げているのです。

また、伝統的に、身体が不自由な人たちの問題も扱ってきました。例えば、“Assistance Dogs”（補助犬の話）や“Pete Gray”（片腕の大リーガーの話）などです。そして、人権や共生の問題のマイナスの極限として、「戦争」がありますが、NC は広島・長崎の原爆の話題を伝統的に取り上げています。

このような題材については、英語の教科書なので、そういうものを取り上げなくてもよいという声もあるのですが、私はそうは思いません。日本語でも英語でも、ことばは、私たちの価値観や人生そのものを背負っていますし、人権や共生の問題はこれを端的に表す大切な問題だからです。英語教育がことばの教育である以上、必然的にこの種の問題も取り上げるべきです。現行版でいうと、2年生の「地雷」（Lesson 8 “Landmines and Children”）や3年生の「難民」（Let’s Read 2 “Human Rights for All”）もこの種の問題です。ただ、扱いの上で気を

つけないといけないのは、表面的な扱いにしてはいけないということです。冒頭の話にも出てきましたように、私たち自身の生き方や思いとして、心のこもった文章を提供できればと願っています。

4. 「多人種」「多宗教」「格差社会」の国、アメリカ

森住 では、次にスピーチの話に移りたいと思います。スピーチは、NC では伝統的に取り上げてきた形式ですが、スピーチ教材に関してはどのようにお考えでしょうか。

鈴木 まず、スピーチと切っても切り離すことができない話として、アメリカにおける、「多人種」「多宗教」「格差社会」という側面をお話しようと思います。

カンザス大学修士課程2年のときに Teaching Assistantship をもらえて、Speech Communication の授業を担当していました。新学期に「みんな、こんにちは」と言っ、顔をあげて、びっくりしたんです。そこには、ヨーロッパ系もいれば、アフリカ系もいれば、アジア系もいれば、数ヶ月前に移民で父親についてアメリカに来たばかりで、私なんかよりもぜんぜん英語ができない人もいれば、アラブの高級官僚の息子など、人種がばらばらです。アメリカは、人種のるつば、あるいは mosaic society と言われる国であり、人種が違くと、当然、宗教も違う。同時に、立場も価値観も変わってきます。それから、普段、私たちは、アメリカに関しては階級をあまり意識しないのですが、階級の格差もあります。アメリカで授業をやっていると、否応なしに、文化とか、人種の違い、階級の格差みたいなものを考えざるを得なくなるんです。アメリカ研究では、アメリカ文化を知るための4つのキーワードとして、“gender” “race” “ethnicity” “class” があるくらいです。

関連して思うのは、アメリカにいたときに、日本人は “I say something, because I have to say something.”、何か言わなければならない状況だからしかたなく話し、一方、韓国の人は、“I say something, because I have something to say.”、語るべき何かがあるので話すと言われました。日本人は状況を考えすぎたりして、嫌々、意

見を言ったりしているのですが、韓国の人は、他人と反対意見でも、自分が信じていけば言うし、逆に、賛成意見でも理由をつけて言うらしいんです。先ほどの森住先生の「問題を他人事としてとらえてはいけない」という話を聞いて、アメリカ人の尊敬する教授から、「健、この国ではね、他人事を他人事としてとってはいけないんだ。あなたが、人種差別に反対だったら、立ち上がって、声高に言わないといけない。この国では、黙認していれば、あなたはサポートしていることになるんだよ」と言われたことを思い出しました。意見が言えるためには、自分のことはもちろん、他人のことで、このときに差別された黒人の人たちはどう考えたろう、自分がその立場だったら、どのように話すかというように、ロールプレイング的に他人の立場に立って答える問いかけが必要だと思います。

日本もだんだんと、ethnic なバックグラウンドを持った人たちがいることが、都市でも地方でも珍しくなくなっていますよね。そうした多文化社会化は、よいことだと思うんです。けれども、同時に、日本人同士でも格差社会が進んでいるという悪い側面もあります。これからは、自分の立場を主張をしていくということと、他人の痛みがわかり、他人のために社会としてどうあるべきかについて発言する訓練、考える訓練をしていかないと、日本はどんどん悪い方向にいつてしまうような気がします。

5. 日米のコミュニケーション教育

鈴木 その関連で、アメリカにおける、段階的なコミュニケーション教育についての話をさせていただきます。アメリカでは、保育園くらいから、Show & Tell をさせます。この訓練が、小学校高学年くらいまであって、それと重なる形で、Public Speaking につながっていきます。Public Speaking には、3つの目的があります。まず、to inform で、自己紹介、セールスマンによる語り、あるいは、大学の教員の講義などがあげられます。それから、芸人さんみたいに面白い話をして楽しませる to entertain。最後の段階が、to persuade です。説得して、投票してもらい、募金してもらい、献血してもらいなどがこれにあたります。その

Public Speaking の教育が、中学校くらいまで続き、途中から Discussion に重なって、最後に今回は Debate をするという、段階的なカリキュラムが組まれています。

私が常づね思うのは、今、日本の教育は、縦割りで、他教科の先生と、あまり対話する機会もないし、なわばりみたいになってしまっているんです。例えば、アメリカでは、Discussion の手法は、社会科の時間でも学ぶことができます。Discussion を教えるのか、Discussion を使って内容を教えるのかという問題ですが、例えば、市長選挙があると、その日の朝刊を先生が持ってきて、生徒に社説を読ませたりします。A 新聞は、こちらの候補者を応援していますね、B 新聞はこちらの候補者を応援していますねというような解説をして、それから、みんなで Discussion をして、授業の最後には、模擬投票までやってしまうんです。じゃあ、明日の投票結果と比べてみようというようにやるんですけど。アメリカ合衆国では、自分たちが社会に対して、関わったり、関心を持っていくために、それは当然のことなんです。

森住 7～8年前に聞いた話なんですけれど、実は、日本の社会科でも、ディベートの練習を始めているようです。しかし、日本の場合には、ディベートをやると仲が悪くなると聞きます。それから、いじめが起こる。「さっきお前はあんなこと言ったじゃないか」などとなるらしいのです。つまり、意見を対立させることが、人間の好悪や正邪の判断ではないんだということがわからないのです。その土壤がまだできていないんですね。ですから、ディベートをやると仲が悪くなる、という現象が起こってしまうのです。この問題は根が深いですよ。

鈴木 実は、アメリカの高校や大学でも Debate をやらない学校は多いです。Show & Tell は保育園、小学校とやるんですけれども、そのあと、Public Speaking, Discussion までで終わってしまうところも、多いんです。

以前、日本の中学校の国語の教科書に、ディベートの場合は、机をななめに並べて、2、3人ずつ座って、審査員は前にいて、というようなことが書かれているのを見たことがありますが、そのような方法

論よりも、大事なのは、コミュニケーション教育の重要性なり、ステップ別という発想だと思うんです。いきなりディベートをさせるのではなく、まず、自己主張なり、考えさせる訓練をやって、最終的に、ロールプレイング的なディベート、つまり賛成論と反対論の提唱者としての訓練にいけばよいのです。

私はまず、コミュニケーション教育のためにも、過去の日本的な叙情やなさが感じられたり、感情を読み込む、行間を読むなどの訓練をしっかりすべきだと思っています。以前、私が英文科で教えていたときに、学生に抜群の人気を誇っていた助手さんがいまして、学生に聞いてみたんです。「この先生の文学の授業は何で楽しいの?」と。すると、まさに、訳読をさせるのではなく、「彼女がそのとき沈黙した…」という部分で、この「…」の部分では、心の中で彼女は何を考えていたか考えてごらんと、感情を読みとる訓練をさせていたらしいんです。そういう授業は、文学の授業に限らず、コミュニケーションの授業でも、英語の授業でも必要だと思います。やはり、人の気持ちをわかるようにする訓練と、自分の立場から主張する訓練の両方を、バランスよく教える必要があると思います。

私は、他人の気持ちがわからなければ、自分の気持ちはあっても、状況判断、社会判断や歴史判断などについて自分なりの判断はできないと思うんです。それと、自己責任というのは、今、非常に悪い意味で使われることが多いんですけど、権利の裏返しとしての責任ということを理解できる人たちが社会をつくっていく必要があると思います。そのためステップ別のコミュニケーション教育を、日本でもできないはずはないし、教科書の仕事に関われば、科目を超えて、また、大学、高校、中学校、小学校、そして、幼稚園までの先生が集まって、理想の教育、教科書をつくっていかないといけないと思っています。

6. 日米のコミュニケーションスタイル

森住 私は、最近では、「幼・小・中・高・大・院・社会」という言い方をしているのですが、確かにこのような<縦>の連携が必要です。ついでに言うと、国語や社会、道徳などと英語というように<横>

の連携も必要ですね。

ところで、話をもとに戻しますが、一般に、欧米のスピーチには、結論を先に言うというスタイルがあります。ディベートを日本でやるのは、まだ無理なように、私は、西洋のスピーチスタイルそのものを日本に持ってくることに限っては、多少の危惧を抱いています。全部が全部、西洋に染まる必要はないと。日本のレトリックで、漢詩の形式からもらった、起承転結というものがありますが、それは、西洋の人にとってはまだるっこいようです。最初に結論を言ってほしいと。しかしながら、英語教育で、特に、高校におけるライティングの指導やスピーチの原稿の指導の際に、結論や「話題文」を先に出すという指導をどこまでしてよいのか悩むところです。日本人には日本人のスピーチの仕方があり、回りくどいけれど、最後には結論にいきつくという形式があってもよいのではないかと思います。

鈴木 実は、よく知られる、欧米のレトリックとかアメリカのコミュニケーションスタイルとは、正確には、アメリカのレトリックではないんです。私たちが「アメリカ人のレトリック」と言うとき、それはアメリカ人の中の白人中流男性のレトリック、コミュニケーションスタイルのことをしばしば指しています。ですから、アメリカ人女性やアジア系の方は時に日本人と同じように、回りくどい言い方をするし、アメリカの黒人の方に、日本的なコミュニケーションスタイルで説明すると、まさに私たちと同じだ、わかりやすいと言われたりします。

森住 もう1つ、つけ加えて言うと、ヨーロッパ系アメリカ人じゃないですか?

鈴木 ヨーロッパ系ですね。アングロサクソンの方などです。Introduction (序論)、Body (本論)、Conclusion (結論)と続く白人のLinear Logicに



森住 衛

対して、コミュニケーション学者は *Convuluted Logic* と呼ぶのですが、ぐるぐる回ってだんだん中心にいくロジックは、実は、*African American* の人なんかにもすごくわかりやすい。

森住 アジア人もそうですね。

鈴木 アジア人もそうです。

森住 道具として英語を使う場合、英語は、「日本人らしさ」など、いかなる精神も入れ込む「器」でなければいけないと思っているんです。スピーチレトリックもこの議論に当てはまります。英語のレトリックだけではなくて、日本語らしいレトリックも英語を使って言ったってかまわないわけですね。いつも結論を先に言わないといけない、ということになってしまっはいけないと思うんです。

鈴木 アメリカ人のコミュニケーションについては、他にも面白い話があります。先ほど言ったように、アメリカでは、多文化、多人種、多宗教、階級の差が大きいので、必要性からどうしても自己主張だけうまくなってしまいうんです。日本のビジネスコミュニケーショントレーニングでは、ほとんどがもっと話せるようにする、得意にすることに時間がさかれるんですが、アメリカのビジネスコミュニケーショントレーニングでは、「もっと話を聞け、話すのはよいから」と、人の話を聞くことに専念させる。だから、ビジネスピープルのディベート研修などで官公庁や企業に呼ばれて行ったときには、「みなさんは、半分はすでに *good debater* だ」と言うんです。「*Japanese people* は *good listener* だから、誇りを持ってください、自信を持ってください」と。一方、アメリカ人は、自己主張だけは得意だけれど、相手の話を聞いていないので、*bad debater* だという話をすると、どっと笑いが出て、緊張がとけるんです。

森住 まさにそうだと思いますね。

鈴木 もう1つ面白いのは、アメリカ人でも話が苦手な人もいます。自著の“*Lingua Frankly*”にも書いたのですが、アメリカのコミュニケーション学部の名門校は、中西部に集中しているんです。*Ivy League* を中心とする東部の学生さんたちは洗練されているので、*Public Speaking* なんてお手のものなんですよ。西海岸の人たちは、非常に社交

的なのでそのような学部は必要ない。ところが、農村部が多い中西部の人たちは、^{ぼくどつ}木訥で話下手なので、自分の子どもたちが大学を卒業して、社会に出て、*survive* できるのかということをおとなたちが心配して、コミュニケーション学部をたくさん設立させたという経緯があるんです。だから、いまだにコミュニケーション学部の名門校というと、アイオワとか、カンザスとか、ミネソタとか、中西部のいわゆる田舎っぺい大学なんです。私が *Teaching Assistant* をしたカンザス大学でも、*Speech Communication* は、理系の学部の必修科目でした。理系のエンジニアの人たちも話下手だったり、木訥な人がいるので、そういう人たちがミニマムな *survival skill* として、取りにきているんです。ですから、英文学とか、経済学専門の人とかは、べつに *Speech* をやらなくてもよいという発想なんです。

7. NEW CROWN のスピーチ教育

森住 どんな人もミニマムなスピーチスキルが必要ですね。そのためには、対話技術も必要ですが、その前に、自分なりの意見を、叙述文できちんと書ける、あるいは叙述文で言える能力が必要です。スピーチの基本は叙述文だからです。実は、*NC* は、これまで叙述文主導だったのです。1978 (昭和53) 年度版やその直後の版の *NC* を見ると、叙述文の多さは一目瞭然です。これがしっかりしてさえいれば、あいさつや日常会話は、適宜、その場で補える。今は、学習指導要領などの影響もあり、*NC* も多少は変わってきてはいるのですが、それでも、中学校の教科書としては、叙述文が多い方です。これは、30年前から変わらぬ姿勢です。確かに、会話の妙味もありますが、会話で突発的に戦争の話や、自分の夢の話などはできないですよ。話題も日常生活のことに終始しがちになります。叙述文の場合は、イントロがあればすぐ本題に、それも、深い内容に入れます。中学の早い段階でも、スピーチの基本として、まず、3行でも5行でも叙述できちんと言え、書けることを目標としておけば、かなり力がつきます。アメリカ合衆国で、初期段階で行う *Show & Tell* やその後の *Public Speaking* も、叙述ですよ。それが、高度になるにつれ、

Discussion や Debate などになっていくわけですね。

もう1つ、NC がスピーチを取り上げる理由として、自己表現の観点があります。すなわち、自己の発露です。叙述文を、自分の立場で書けば、そのまま自己表現になります。これは、「聞いたり、読んだり」することから、「話したり、書いたり」することへの移行にも関係しています。つまり、受信から発信です。このように、自己表現という発信型コミュニケーションとして、スピーチを重要視してきたのです。

なぜこの立場をとってきたか、つまり、この理念の前提にあるのは、思い起こしますと、1980年代から1990年代にかけて深刻になってきた「ムカツキ・キレル子どもたち」という現象でした。ことばで表せば「発散」できるのに、つまり、自己表現できるのに、暴力をふるってしまうわけです。この問題を英語教育の立場からも考えたかったのです。ところが、この問題は当時だけの問題ではないですね。今でも続いているとも言えるし、最近の大人の問題でもあるとも言えます。つまり、自己表現と発信はいつの時代でも必要というわけです。

8. おわりに

鈴木 昔、アメリカで演説というと、Public Address でよかったというのは、低い立場の人や、一般の人が演説などをしなくてもよかったんでしょうね。任せておけばよかったのが、だんだん中産階級のような方が広がって、平等になっていっていったん、いろいろな人がいろいろな価値観を持って、いろいろなことを言うようになり、American Rhetorical History という学問が成立するようになっていったんです。日本も70年代くらいまでは右肩上がりだったんで、お偉いさんだとか、長老だとかに任せておけばよかったんです。しかし、だんだんシステムがうまくいかなくなって、教育レベルも上がってきたときに、それぞれが自分のことを主張して、それらをうまい形でまとめていかないと、まとまりがつかないようになってしまったのではないのでしょうか。日本もアメリカも同じで、一言で言うと、community が喪失したんです。アメリカも

community が崩壊してから、少年犯罪とか、社会的な犯罪率も高まったし、日本もそういう時期になりかけているんだと思うんです。だから、コミュニケーション教育の必要性が今ほど日本で高まっていることはなくて、森住先生のお話を聞いて、まさに今こそ自己発信することで、自分の意見をわかってもらう必要があると思いました。

森住 公民権運動の話のところで、鈴木先生が言われたように、人には時代のめぐりあわせがありますね。また、それぞれの人生に、よい時と悪い時があるように、国、社会にも同じようなことがあるような気がします。そういう点で、現在の日本の子どもたちもいろいろな問題を抱えています。消費社会のまっただ中にあり、モラルも壊れてきています。これは、大人の責任とも言えます。学校教育の教科の1つとして英語科があり、検定教科書が使われているわけですが、このような社会状況にあるだけに、教科書の内容とこれを支える形式をますます大切にしなければいけません。

今日は、「I Have a Dream」をきっかけとして、「題材」と「スピーチ」のことについてお話を伺いましたが、これをできるだけ活かすような形で、また教科書を考えていきたいと思います。今日は、貴重なお話をありがとうございました。

鈴木 楽しく話させていただきました。ありがとうございました。(2009年6月)

森住 衛

桜美林大学大学院教授・大阪大学名誉教授。専門は英語教育学・言語文化教育。共編著や監修などに『英語教育と日本語』（中教出版）、『英語要覧』（大修館書店）、『言語文化教育学の可能性を求めて』（三省堂）、『単語の文化的意味』（三省堂）、中・高の検定教科書 *New Crown 1, 2, 3・Exceed I, II, Reading, Writing*（共に三省堂）などがある。

鈴木 健

明治大学准教授。専門はレトリック批評・スピーチ・コミュニケーション論。特に、政治演説とポップ・カルチャーの研究に力を入れている。フルブライト研究員として、南カリフォルニア大学コミュニケーション学部客員教授を歴任。共著書に、『英語ディベート理論と実践』（玉川大学出版部）、『説得コミュニケーション論を学ぶ人のために』（世界思想社）などがある。

“I Have a Dream”で「読む」力をつける

梶田留美

(東京都江戸川区立小岩第四中学校)

1. 『Roots』との出会い

小学生のときに、『Roots』というテレビ番組を観て、強烈な衝撃を受けたのを覚えている。1977年にアメリカで放映され、視聴率は50%を超えたという。同年10月に日本ではじめてテレビ朝日系列の局で放映された。40歳代の先生方の中には、私と同様に強い衝撃を受け、感動された方が少なくないと思う。

原作はピューリッツァー賞を受賞したアレックス・ヘイリーによるノンフィクションである。18世紀半ば、西アフリカのガンビアから奴隷商人によってアメリカへ連れて来られ、奴隷となっていく主人公クンタ・キンテとその子孫の数奇な運命が物語の軸となっている。

私の脳裏に焼きついて離れないのは、家族と平和に暮らしていた主人公クンタ・キンテが、まるで獣が捕らえられるかのように奴隷商人に捕まえられ、手足を鎖につながれて泣き叫ぶシーンだ。劣悪を極める奴隷船の中では多くの者が死んでいく。生き残った者だけが奴隷としての価値があるというのだ。残酷だと思った。アメリカ到着後、手足を縛られ、吊るされて競売にかけられるシーンにも涙がこぼれた。

2. Pre-Reading

キング牧師の授業を展開するとき、上記のことに触れずにはいられない。奴隷制度は約150年前に廃止されたものの、人種差別は続いたこと、キング牧師の演説はわずか40数年前、終戦から13年経って行われたのだということも押さえてから授業に入っている。

＜オーラルイントロダクションの例＞

As you know, there are people from many different places in America. Some came from Europe, some from Asia, some from Africa. Most people from Europe are white, while people from Africa are black. From the 17th century to the 18th century, many African people were brought to America as slaves. Why? People in America needed slaves for their farms. Black people were used by white people. In the 19th century, black people were freed. But even after that, they could not live like white people. They were discriminated against in their daily lives. Martin Luther King Jr. worked for the rights of African American.

3. While Reading

中学校入学当初は、「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」の順序で指導を進めるのが常套手段だろう。教科書本文を導入する際は次の手順で行っている。「本文に書いてある要素を事前の活動の中に盛り込み、ピクチャーカードを見せながら英語を聞かせ、内容を把握させる」→「理解できた英語を教師のあとに続いて言わせる」→「聞いて言えるようになった英語を文字と一致させながら読ませる」→「読めるようになった英語を文字を見ながら書かせる」といった具合だ。

もちろん、この手順ですべてのレッスンを展開するわけではない。特に「理解の能力」を高める際、「聞くこと」の活動一辺倒ではよくない。「読むこと」の活動に重点を置いた授業を展開することも必要だ。新学習指導要領の外国語の目標にも「読むこと」「書くこと」という言葉が加えられた。「聞くこと」に重点を置くか、「読むこと」に重点を置くかは、発達段階や題材内容によって、3年間を見通して計画を立てなければならない。

さて、「読むこと」の活動に重点を置く場合、私が

大切にしていることは、「生徒一人ひとりに、はじめて見るまとまった文章を自分自身の力で読む体験をさせること」である。そのために、題材内容理解に入る前に、新出文型・文法・単語は指導してしまう。それらは、生徒がはじめて見るまとまった文章を読むための tools (手段) だと考えるからだ。

私は発達段階や題材内容によっては、レッスンをセクションごとに区切らずに、一気に読ませてしまう。「まとまった文章」を読ませるためだ。また、ピクチャーカードを用いてのオーラルイントロダクションは最小限に留め、生徒たちに「読む理由」を与えるようにしている。さらに、生徒に読ませる際に、最初からリーディングポイントを与えないようにしている。一定の時間(1ページ1分程度)を与え、まずは自力で黙読させ、次にワークシートでリーディングポイントを与えて、再度黙読させている。初めからリーディングポイントを与えてしまうと、ヒントを与えずぎてしまうと思うからである。

Lesson6 “I Have a Dream” を読ませるにあたっては、前述した Pre-reading のオーラルイントロダクションの最後に教科書 p.52 のキング牧師の写真を提示し、What did he do for the rights of African Americans? (キング牧師はどんなことをした人だろうか) と投げかけ、次に p.53 の当時のトイレ表示と当時の水飲み場の写真を提示し、What do these signs mean? (これらの表示が意味することは何だろうか) と投げかけ、さらにローザ・パークスさんの事件についての教科書準拠のピクチャーカードを順に並べ、What happened? (何が起こったのだろうか) と投げかけてから、Let's read about them. / Let's find out the answers of the questions. (では、それらについて読んでみよう) と促す。生徒たちに「読む理由」を与えるのだ。そして、Section 1～4 を一気に読ませることにしている。

<ワークシートの設問の例>

Section 1

1. I have a dream のスピーチはいつ誰が行ったのですか。
2. その人の夢はどのようなものでしたか。

Section 2

1. 当時、黒人が使えないものには、どのようなものがありましたか。

2. 社会の不平等に対して戦っていた女性の一人は誰ですか。

Section 3

1. ローザ・パークスさんが逮捕された経緯を述べましょう。
 - ① ある日、ローザ・パークスさんは、バスの中の()に座った。
 - ② 間もなく、()。
 - ③ 運転手は「()」と言った。
 - ④ ローザ・パークスさんは、()。
 - ⑤ 警官が来てローザ・パークスさんを逮捕した。
2. キング牧師と彼を支持する人たちは、どのような行動をとりましたか。
3. その結果、黒人たちはどのような権利を勝ち取りましたか。

Section 4

1. 1964 年、キング牧師が受賞した賞は何ですか。
2. それから4年後キング牧師はどうなりましたか。
3. 最後に筆者(健)はキング牧師の夢についてどのように述べていますか。

4. Post-Reading

冒頭で『Roots』について紹介したが、教科書本文を読み終えたあとで、あるテレビ番組を録画したものの一部を見せている。2002年2月に日本テレビで放映された『知ってるつもり?! 非暴力・非服従ガンジー&キング牧師』の中のキング牧師についての約10分間の映像である。ローザ・パークスさん逮捕後、バスボイコットが行われるまでの経緯、ボイコット当日、乗客がいまま街を走るバス、KKK(黒人を迫害した秘密結社)による暴力、デモ中の黒人にかみつく警察犬や黒人を吹き飛ばす放水、キング牧師のスピーチ…。それらの映像を、とても興味深そうに生徒たちは観ている。

本文を読み終え、さらにビデオを観たあとで、感想や意見を書かせるというやり方もあるだろう。しかし、アメリカにおける人種差別の歴史や現実を知らない我々が書くと、極めて表面的なことになってしまうのではないかと懸念する。それらのことに、生徒たちが興味を持ち、さらに理解を深めようという意欲を持たせられたら、すなわち本課の学習がそのきっかけになればいいと考える。

そして「今でも生き続けている、私たちすべてにとって重要な意味を持つ彼の夢とはどのようなものだろうか。そのために私たちにできること、私たちがしていくべきことは何だろうか」と問いかけ、これらを生きていく生徒たちに考えさせている。

“I Have a Dream”を通して 子どもたちに伝えたい思い

桑山 洋

(奈良県奈良市立富雄中学校)

1. はじめに

10年以上も前から *NEW CROWN* ではこのタイトルが載せられており、英語暗唱大会でも題材としてよく取り上げられました。まだ自分の学校の教科書として *NEW CROWN* を使用していないころ、暗唱大会に参加する度に数名が発表するこのストーリーを聞き、感動を覚えたものです。

本教科書では、人として深く考えていきたい歴史や社会の問題、人権の問題などが多く扱われています。2年生の最後にカンボジアの地雷の現状に触れ、3年生の前半に原爆の子の像のモデルの佐々木禎子さんの話と“The Whale Rider”，そして3年の2学期、自らの進路を考え、視野を広く世の中に向けられるような時期になっていよいよこのLessonの登場。そしてそのあとに“A Vulture and a Child”が続きます。

私は、この“I Have a Dream”では、関係代名詞の学習や暗唱の題材など英語の教材として授業を展開するのはもちろんですが、人権学習の視点にもよりいっそうのウエイトを置いています。

2. 人権学習の視点からの導入

「ジョージア州アトランタといえば何を思い浮かべる？」

私の授業はこの言葉で始まります。答えは、

- ① オリンピック
- ② コカコーラ本社 (缶コーヒーはジョージア)
- ③ 風と共に去りぬ

そして、『風と共に去りぬ』の舞台、南北戦争の舞台なのです。南北戦争といえば、自由貿易や黒人奴隷制度を巡っての北部商工業地域と南部農業地域

の人々の戦いですよ」と続けます。

冒頭のキング牧師のスピーチを読んだあと、人種差別と奴隷制度にまつわるアメリカの歴史という時代背景から入ります。なぜ南部の地主が奴隷制撤廃を拒んだのかにも焦点を当て、“What do you do if you are an owner of a large farm?” “What do you think about it?” と、生徒たちの意見を聞いてみます。

そしてSection 2に入り、関係代名詞を使った文のリズムを楽しみながら音読するとともに、差別の実態や現状を読み進めます。また、教科書の写真の‘LADIES’ ‘MEN’ と ‘COLORED’ というトイレのドアを指し、「我々日本人はどちらのドアを使うのだろう。“Which door can you use?”」と、生徒たちに問いかけます。自分たちが‘COLORED’で被差別の立場であることを、初めて実感する生徒も少なくありません。この発問で生徒の目の色が変わります。人ごとではなくなるのでしょうか。

3. クライマックス そして暗唱へ

Section 3 はあのローザ・パークスのバス事件です。彼女は2005年10月に亡くなり、当時日本の新聞にも載りました。ここは切り抜いていたその記事を含めた差し込み資料プリントを使って深めていきます。

ドラマチックに仕立てられた場面設定によって、生徒たちの興味は引きつけられていきます。Section 4の権利獲得、ノーベル賞受賞、そして暗殺まで、生徒のイメージを十分にふくらませながら一気に読み進めていきます。また、Section 3に入ったあたりからこのLessonを暗唱しようと提案します。生徒たちがストーリーの内容、ドラマ性、

キング牧師の活躍にときめきと感動を覚え、自分の口で表現したいという気持ちを高めていくのです。

ちなみに私はこの題材に限らず、音読練習の時はよく立って読ませます。生徒が全員起立して、教科書を持って音読するのです。こうすることで生徒は読むこと以外はしなくなり、音読に集中できます。体が伸び、顔も上がるので声も大きくなります。さらに、対話形式の本文の時には隣の人や近くの人とペアワークをするのも簡単です。私が最近取り入れた授業の工夫の中では一番ヒットだと思っています。もしよかったですら皆さんもやってみて下さい。

さて、最後のキング牧師のスピーチの一節から、21世紀を生きる若者として、「差別や戦争がなく世界の人たちが互いに話をしてわかり合える世の中」「隣の人と手をつないで笑い合える世の中」「いろいろな肌の色の人が同じテーブルで食事を楽しめる世の中」を作っていこうと、生徒たちに訴えかけていきます。「そのために英語を学ぼう」「多くの人とわかり合える英語という言葉覚えよう」という話もここでは説得力があるようです。

授業を終えたとき、生徒の多くが、差別の実態やそれに立ち上がった人々の思いや歴史を知り、大人びたものの見方・考え方になったように感じました。

「キング牧師の熱い思いと、1年間もバスをボイコットし続けた人々の行動力に感動しました。一人ひとりの小さな力が集まれば、世の中を変えるほど大きな力になって、夢が実現することがわかりました。私も自分の夢に向かってがんばろうと思います。」

例年こういう流れでこの題材を扱ってきましたが、昨年はオバマ米大統領が大統領選でキング牧師の言葉を引用したことで、NHKが『その時歴史は動いた』でキング牧師を取り上げてくれました。そのドキュメンタリーの内容は、まさに私が毎年生徒たちに伝えようとしてきたことそのものでした。授業を終えてからクラスでそのVTRを見せたのですが、映像になっていることでさらにわかりやすく、特にバスボイコット事件は臨場感をもって見ることができました。今後このVTRをうまく使うことができれば、さらに洗練された教材に仕上がっていくように思います。

4. 人権学習の実践の中で

富雄中学校には、総合的な学習の時間や道德での国際理解と人権学習の流れがあります。1年生でユニセフの活動に学び、2年生ではアフリカの飢餓問題やストリートチルドレンの問題についてゲストティーチャーを招いて学習し、英語の授業でもカンボジアの題材の中で、栗本英世氏のVTRなどを見ながら学習を深めます。3年生になると、合唱コンクールの課題曲が「We are the World」で、1学期から練習を始めるのですが、歌詞の意味を学ぶと同時に、ビデオクリップを視聴し、当時の歌手の願いや思いを受け止めながら、心を合わせた合唱に毎日取り組んでいきます。そして9月に合唱コンクールが終わると、社会科と道德で部落問題学習を進めます。生徒たちは日本に目を向け、今も残る差別の現状を学び、人権感覚を高めていくのです。そしてその直後に、この「I Have a Dream」。今度は英語の授業で、アメリカの人種差別問題に取り組み、次の「A Vulture and a Child」で、生きること、食べること、共存、援助などについて改めて考えていきます。外国にも目を向けるのです。さらに12月には、在日の韓国人のゲストティーチャーを迎えて講演を聞き、クラスごとにチヂミを一緒に作って食べるという活動をしています。

英語を担当する私としては、このキング牧師の教材を英語としてはもちろん人権学習としても、3年生の学習の山場と位置づけ、前述したような思いで取り組んでいます。このようなすばらしい教材に出会ったことに感謝するとともに、世界の人々と手をつないで同じ思いを共有できるような生き方を、これからも生徒たちと一緒に考えていきたいと思っています。

“I Have a Dream”ブックレビュー — M. L. キングを縦横に知る! —

室井美稚子

(清泉女学院大学)

■はじめに

キング牧師と公民権運動と現在を結ぶ、「言い得て妙!」と思わせるフレーズがあります。“Rosa sat so Martin could walk, so Obama could run, so our children can fly.”「ローザが座ったのでキングが歩くことができた、だから、オバマが走ることができた(この時点では run for president の意)ので、我々の子どもたちは飛ぶことができる。」これは、アメリカ大統領選挙の際に聞かれたフレーズで、Tシャツまで作られました。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの誕生日は、数少ないアメリカ全体の祝日ともなっています。これほど偉大な人物の足跡を多面的に生徒たちに紹介するには、まずは次の4冊をお勧めします。

●ラリー・ゴニック『まんがで学ぶアメリカの歴史』 (明石紀雄監修, 増田恵里子訳, 明石書店, 2007)

まず本書の素晴らしいところは、アメリカ合衆国の400年の通史を学べるところにある。それも漫画入りであるから、親しみやすいだけでなく、当時の風俗もわかる。奴隷を投入し、先住民を駆逐し、戦争などで領土を拡大していく歴史が、ヨーロッパや南米諸国との政治および経済関係も踏まえて書かれており、理解が大変深まる。「歴史的意義の理解」という難しい作業を手助けしてくれるだけでなく、著者のコメントが洒落で風刺が効いて出色である。

キング牧師その人の扱いはそんなに多いとは言えないが、何より彼が輩出されるに至る知識が豊富に述べられている点が得難い。奴隷制を導入した歴史的背景や彼らの待遇などである。初期の「奴隷法」では、次のようなことを合法としている。例えば、

「主人が自分の奴隷を15時間ずつ週6日働かせること」や「主人が殺害をはじめ、望むような方法で自分の奴隷を罰すること」である。また、読み書きを学ぶことも許されなかった!

そして、南北戦争・奴隷解放といえばリンカーンくらいしか人名が浮かばない身としては、逃亡奴隷で解放に力を尽くしたハリエット・タブマンやフレデリック・ダグラスという人物名を初めて耳にし、その活躍を知ることができたのは有益であった。「アフリカ帰還」運動やクー・クラックス・クランなどの存在、それらを超越しようとする動きから、1960年代の公民権運動への道は長かったことがわかる。

●M. L. キング『自由への大いなる歩み —非暴力

で闘った黒人たち—』(雪山慶正訳, 岩波書店, 1959)

本書はM. L. キングその人によって書かれ、書名にたがわぬ内容である。「愛と非暴力の思想」をいかに模索し、人々に伝えていったか。個人的な悩みや運動の迷いなどが率直に語られていて、偉人であるだけでない人間キングに出会うことができる。

「おれはこんな制度なんか決して承認しないぞ」と言っていた父との少年時代の思い出、抗議活動以前のモントゴメリーの「白人に頼って生活している」黒人の現実やそこから生じる問題、1955年のローザ・パークスの勇気に始まる抗議行動。そして、バスボイコットを迎える月曜日の朝のキングの心情がひしひしと伝わってくる。

人種の隔離を廃止させた運動の詳細や、そこから生じた非暴力運動への自信、また今後の運動の展開への不安などが語られている。特に、執拗な脅しにくじけそうになる自分との戦い。「人々はわたしの指導を求めています。もしも、わたしが勇気もなく

彼らの前に立つならば、彼らも勇気を失うでしょう」と苦悶している。人種問題は「まだまだ解決されるにはほど遠い」という状況の最中にあった M. L. キングとしては、道半ばに倒されるかもしれないとの予感の中で、それこそ必死に書いたのが本書である。

生徒には、もう少し易しい社内鏡人ほかによる『キング牧師』（岩波書店、1993）を勧めてもよいかもしれない。

●上坂昇『キング牧師とマルコム X』（講談社、1994）

アメリカの公民権運動を語るとき、キング牧師とマルコム X は光と陰のように対比されることが多い。非暴力をつらぬこうとするキングに対して、マルコム X は、一部の白人の暴力のすさまじさに、共存は難しいとする考え方をとった（後年は共存を模索した）。聖職者の家に生まれたという共通点があるものの、家庭環境でも明暗を分けた。マルコム X は、幼少期に、黒人解放を唱えた父を殺されたと言われており、本名のマルコム・リトルのリトルは奴隷時代の名字だとして X とした。イスラム教に帰依したマルコム、一方、キングはソローやガンジーの影響を強く受けた。

本書は「巷間に流布しているキング思想やマルコム X 思想には、誤解や不十分な理解や誤った解釈がある」としており、彼らの考えを知ることはアメリカの公民権運動について知るだけでなく、「多くの国が直面している人種問題や民族問題の解決に欠かせない」とある。

また、この両者については映画もある。映画『マルコム X』では、彼が刑務所の中で黒人であることに目覚める過程で、black に関連した語に black market など、いかに否定的なものが多いかを先達に教えてもらうシーンが印象深い。M. L. キングについては、バスボイコット事件を中心に扱った『ロング・ウォーク・ホーム』があるが、今年スピルバーグ監督が彼の人生を映画化する権利を獲得したようなので、どのような作品になるか大いに楽しみである。

●ジェームス・M. バーダマンほか編『アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書』（ジャパンブックス、2005）

アメリカの発見から 1960 代までの通史で、それ

もアメリカの小学生用に編まれた教科書である。教科書といっても日本のような検定制度はないので、その作成過程は趣を異にする。大学教授である著者が、学生たちのあまりの基礎知識のなさに危機感を抱き、自ら歴史書を編纂した。それがベストセラーとなり、小学生用の教科書へと発展したそうである。小学生用なので平易な英語で書かれていて、図や写真が多いのも理解の手助けになる。また、本書は日本の英語学習者用に対訳本になっているのが嬉しい。

「アメリカ発見から植民地まで」の第 1 章から始まり、第 6 章では M. L. キングをはじめ、黒人差別法やバスボイコット事件からワシントン大行進などに多くのパートが割かれている。また、最終章である第 7 章に「公民権運動のリーダーの死」が扱われ、マルコム X のことも紹介されている。

また、同じ著者による『黒人差別とアメリカ公民権運動 — 名もなき人々の戦いの記録』が集英社新書で出ている。

■おわりに

今、アメリカは黒人大統領を戴くまでになり、M. L. キングの演説 “I Have a Dream” に語られている理想に大きく一歩近づきました。黒人差別は無くなりつつあるように見えますが、イラクやアフガニスタンに行くアメリカ軍における黒人の割合は、人口比に比べて依然として高く、格差の大きいアメリカ社会の中で、教育を受ける機会が少なく、貧困から抜け出せない黒人の現実が垣間見えます。

そういう黒人を含む貧困層の「今」を知るには、堤美果氏の『ルポ 貧困大国アメリカ』（岩波書店、2008）などが何よりでしょう。サブ・プライムローンの問題で世界にも知られてきましたが、アメリカにおいて貧困者が広がる現実には聞きしに勝る感があります。公民権運動は、決して過去の栄光であってはならないとの想いが湧いてきます。

また、翻ってみれば、私たち英語教員は、ALT をはじめ、外国から来た人々と日常的に直に接して、日本の歴史や現状も尋ねられ、説明する立場にあります。自国の社会問題にもっと向き合えばと改めて思いました。



ライティングの採点方法から見た指導と評価

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. ライティングの採点が減点法なわけ

ライティングの採点にはどのような方法があるだろうか。言語テストに関する文献を見てみると、およそ2つの採点方法を中心に解説されていることが多い。1つは全体的採点であり、もう1つは分析的採点である。前者には、5段階ならABCDEをただ単に印象で決める、いわゆる「印象採点」と、それぞれのレベルの特徴を記述した採点基準をもとに行う採点とがある(ただし、採点基準といっても、それぞれのレベルの一般的特徴がまとめて書かれているだけである)。これに対して、分析的採点方法では、語彙・文法・内容・構成・綴りというような様々な観点について、それぞれ個別に判断していく。

しかし、日本のライティングの採点でもっぱら用いられているのは、これらのいずれでもなく「減点法」である。上述の採点方法のうち、特に分析的採点方法は、言語テストの文献では一般的でも、英語教育の現場の認知度はきわめて低く、知られていたとしても、実際に使われる頻度はさらに低い。

こうした現状にはいくつかの原因が考えられる。1つの大きな原因は、海外に比べ、自由度の高いライティング・テストの課題が少ないということである。つまり、日本におけるライティング・テストの課題のほとんどは、和文英訳であって、書くべき内容が規定されているのだ。このため、書けていない部分や間違えている部分を減点していく採点方法が採用される。もし書くべき内容が規定されていなければ、この減点法はうまく機能しないはずだ。また、書かれた内容や構成に関して、主観的な判断を避けていることも、分析的採点が行われない原因となっていると言えるだろう。さらに、仮にいわゆる「自

由作文」が課されていたとしても、書かせる量がきわめて少なく、分析的採点の各観点の判断を行うに足るだけの情報が確保されないという原因もある。

2. 作文の分量について

世界の様々な能力記述を見ると、日本の中学相当と思われるレベルの「書くこと」の記述が、かなり高レベルに感じる。日本の中学のテストでは、複数のパラグラフを書かせる課題はほとんどないが、海外ではこの段階でも複数パラグラフの文章を書かせるのが、当然の到達目標のようである。

日本には、本当の意味での英語教育のグランド・デザインがない。そのため、ライティングの力をどう伸ばすかについて、英語教育に関わるものがみな同じイメージを持っているわけではない。ライティングの能力をどう伸ばすかについては、中学段階で正確さを優先するのか、あるいは量をたくさん書かせることを優先するのかという議論が重要だと思われる。現在、日本の中学校におけるライティング・テストを見ると、明らかに正確さを優先している。しかし、エッセー型のテスト結果を分析すると、あるレベルに至るまでは、学習が進むにつれて書ける量が確実に増えていくことがわかってきている。ということは、初期段階で優先すべきなのは、正確さよりも量なのではないかという気がしてくる。

日本の英語教育が正確さを重視してきた背景には、客観的に採点しやすいということがある。実際、客観的に(または、公平に?)採点することを重視するあまり、客観的に採点できないものは出題しなくなってしまっているのが現状だろう。客観的に採点するということは、採点の信頼性を重視しているということであるが、そのために測るべき能力を

測っていないとなれば、これは妥当性を犠牲にしていることになる。一方、音楽や書道や美術などでは作品の評価を主観的に行っていて、これをほとんどの人が当たり前だと思っている。ある意味では、どのような内容の文章がいいとか、どのような構成の文章がいいということも、主観的に判断する性質のものである。これらを重要なことと考えるならば、テストでも見ていかなければならない。

採点の客観性重視の傾向は、テストの学習への波及効果の問題にもつながっており、より深刻である。テストでまとまった量のライティングを課さないで、まとまった文章を書く練習が行われなくなってしまう。採点の客観性への意識は、入試ともなればより強くなり、結果的に入試のライティング・テストの自由度と量はきわめて限定的となる。最も波及効果の高い入試というテストにおいて、自由度のある、まとまった量の英文を書かせる課題が課されないとなれば、受験勉強の中から「自由作文」が消えていくのも当然だろう。

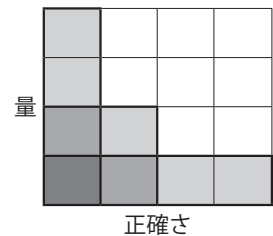
3. 分析的採点の新しい提案

個人的には、日本の中学段階の英語教育が、もっと量をたくさん書かせることにシフトしてもいいのではないかと思う。その上で、採点の客観性のある程度高めたいということであれば、書いた単語の数や行数だけで採点してもいいかもしれない。もちろん、単純に量をかせぐために同じ文をいくつも書いたり、中身や構成をいい加減に書いたりする生徒もいるのではという懸念がある。量を優先するなら、まずはこうした作文を認めるようなところから始めてもいいと思うが、これが本当に問題であると認識するのであれば、中身をざっと確認し、大きな問題がなければあとは量だけで採点してしまうという手もある。量だけで採点するので、採点は客観的である。もちろんこれは学習の初期段階の話で、ある程度のまとまった量を書けるようになったら、その上で正確さを求めていくべきだろう。

まとまった量を書かせれば、もちろん分析的採点を導入することもできる。ただ、この採点方法を導入した場合に悩ましい問題がある。それは、「文法」や「語彙」というような観点を立てた場合、「少し

か書いていないが、正確なもの」と「たくさん書いてあるが、誤りもたくさんあるもの」のどちらを高く評価するかという問題である。

上のような場合の採点で私が提案したいのは、「面積でとらえる」という方法である。この場合の面積とは、「量」と「正確さ」を4段階などで判断し、縦軸に「量」、横軸に「正確さ」として掛け合わせたものである。たとえば、下の図でいえば、「少ししか書いていない(量1)が、文法が正確なもの(正確さ4)」は、縦軸が短く横軸が長い長方形となり、これに対して「たくさん書いてある(量4)が、文法の正確さの低いもの(正確さ1)」は、縦軸が長く横軸が短い長方形となる。どちらも面積は4となり、これは「量」「正確さ」とも2の場合と同じ面積だ。もし「量」と「正確さ」の重み付けを変えたいければ、重視する方の目盛りを大きくすればよい。



もちろん、分析的採点においては、「文法」や「語彙」といった各観点の下位観点の1つである「量」は、「バリエーション」とする考え方もあるだろう。この場合は、単に量がたくさんあるかどうかではなく、どれだけ多様な文法形式や文型を使っているかが問題となる。つまり、同じような文型の文を羅列しても高い評価を与えないというものである。

おそらく定期試験の実際の採点場面では、こうした採点方法ではば問題ないと思われるが、受験者の能力幅の広い大規模テストなどの場合は、答案に現れた文法項目や文型などが示唆する発達段階上のステージによって割り振る点を変えたいという選択肢もあるだろう。文型でいえば、SVCとSVOを使っているよりは、SVOOとSVOCを使っているほうがレベルが高いと判断するという具合である。

「長い自由作文」を課しても、それに応じた採点方法はあろうか。しかし、その前にまとまった量の英文を書かせる指導を始めるということが大前提である。指導と評価は一体化しなければならない、ということである。

本文の読解から 自己表現へ(1)

— 行間を問う —

立川 研一 Tatsukawa Kenichi (大分県九重町立野上中学校)

1. 読解力を高める発問

本稿では、生徒の「読解力」を高めるため、また「自己表現力」へとつなげていくために、教科書本文をどのように活用していくかについて、筆者のこれまでの実践例を3回にわたって述べていく。1回目はまず、教科書本文の「行間を問う」ということについて考える。

18年前、新卒3年目の私は、平成2年度版の *NEW CROWN ENGLISH SERIES* (以下 *NC BOOK 1* の Lesson 10 § 3 を題材に、以下のよ

うな授業を行った。
読者の皆さんは、この本文の「読解」のため、どのような活動を仕組み、どのような発問を行うだろうか？

Lanmei: Your dog is barking, Jiro. Is he saying something?
Jiro: Yes, he is. He's saying, "Food, please."
Lanmei: Listen! He's barking again. Is he still saying, "Food, please"?
Jiro: No. He's saying, "Fruit, please."
Lanmei: Oh! You understand his language very well.
Jiro: Yes. We're good friends.

(平成2年度版 *NC BOOK 1* p.58)

私は、まず「Jiroは犬に何回エサをやりましたか?」と問い、班で話し合わせた。次に、「どの表現、単語からそれがわかりますか?」と問い、本文の細かい表現にまで目を向けさせるようにした。

生徒からは「againという単語から2回エサを与えている」「またほえている」と言っているので、一回目にほえたときにエサはもらってない」「'good friends' というからには、優しく接したはずなの

でエサはあげている」など、様々な発想で活発な意見交換ができた。この結果、自然に本文の読みが深まり、生徒は十分に内容を理解することができた。

最後に私が、「ALTの先生は、『たぶん2回だと思う』と言ってたよ」と告げると、生徒は納得し、逐語訳を求める声は出なかった。

この授業をきっかけに、私は本文理解のための発問の仕方にこだわるようになった。生徒が本文内容により興味を持ち、より意欲的に読み取ろうとする、「よい発問」のあり方を常に考えるようになった。

大分大学の柳井智彦教授はその著書の中で、本文の読解は「知覚語で問え」と述べている。例えば「本文からどのような音が聞こえますか?」「本文から見えてくる色は何色ですか?」など「五感」を問うのである。(『英語授業の上達法』明治図書、1990)

本文には直接述べられていないことをあえて問うことで、生徒は「行間」を読み取ろうと真剣になる。その結果、自然に本文の小さな表現にも注意するようになり、内容の理解がより深まるのである。

この示唆をもとに、私は読解力を高める方法として「行間を問う」発問を多く用いてきたし、現在もそう努力している。以下にその具体的な方法をいくつか述べていく。

2. 五感を問う

現行版 *NC BOOK 1* の Lesson 6 では、耳の不自由な松本さんと、彼女の生活を支える聴導犬ミオが登場する。松本さんの日常が語られる § 1 では、私は「この本文からどんな音が聞こえますか?」と問い、生徒に話し合わせた。

生徒からは、「犬が走る足音」「ドアのベルの音」「外から松本さんと呼ぶ人の声」「犬のほえる声」「本のページをめくる音」など様々な意見が出た。写真から想像した意見も含まれているが、すべてを共感的

に受け止めながら、やはり「どの表現からそう思いましたか?」とたずねていく。1つ1つの意見の根拠を確認することで、生徒たちは本文の単語や表現に立ち返っていった。

また、「この本文に書かれていないことで、ミオが松本さんに教える音にはどんなものがありますか?」とたずねると、「お湯が沸く音」「救急車や消防車のサイレンの音」「(不審者などの) あやしい声や音」など、様々な意見が出され、それらの音を聞くことのできない松本さんの生活や、ミオの仕事ぶりなどを想像する手助けとすることができた。

3. 性格・感情を問う

平成2年度版 *NC BOOK 3 Lesson 5* の“A Present For You”は、O. Henryの短編“The Gift of the Magi”が原作であり、教科書もいわゆる hard-boiled スタイルで書かれていた。登場人物の性格や感情は直接的な表現では一切語られず、情景描写や行動から読み取るしかない。場面から読み取れる色や景色、表情などを問い、登場人物の心理を想像させるのに適した題材であり、現在でも発展学習としてときどき生徒に読ませている。

生徒は、Della が髪を売りに行った店の女店主の台詞の短さから、その「冷淡な性格」を読み取った。例えば Della の “Could you please buy my hair?” というていねいに問いかけに対する、“I buy hair.”, “Take off your hat.”, “Twenty dollars.” などの台詞である。

また、Jim と Della のクリスマスプレゼントの交換の場面では、Jim がプレゼントを直接手渡さずにテーブルにおいたことや、Della の「そんな風に私を見ないで」という台詞などから、生徒は Jim の驚きや落胆を感じ取っていた。

こうした格調高く、読解の価値が高い文学作品が現行の教科書で数少なくなっているのは、個人的には残念なことだと考えている。

現行版 *NC BOOK 2* の Let's Read 1 “A Pot of Poison”では、An, Chin, Kan の3人の小坊主それぞれの「性格」を本文の台詞から班ごとに読み取らせた。An はおっちょこちょい、Chin は活発でいたずら者、Kan は物語のナレーター役も兼

ねており、状況を説明する台詞が多いため、冷静で沈着なイメージがある。性格を想像させることで、台詞の言い回しを深く読もうとする姿勢が見られ、また音読の際にも性格を意識した読み方を工夫することができた。グループ発表で、Kan の “I can feel the poison. I'm dying.” という台詞を「冷静沈着」に読むところでは、笑いも起きた。

現行版 *NC BOOK 2 Lesson 4 § 1* は、Ken が Emma を「アイヌ文化フェスティバル」に誘うところから始まる。私はここでは、「Emma は、Ken の誘いに対して、乗り気ですか、それともそうではありませんか?」とたずねた。

Ken の “Are you free after school?” に対して Emma は直ちに “Yes.” とは答えず、“Maybe. Why?” とたずね返していること、あるいは、“Will it be fun?” と聞いているところなどから、生徒は「最初は Emma はそんなに乗り気ではなかった」ことを読み取った。しかし、ポスターがチラシを見て、「コンサートも行われる」ということに気づいた Emma は、「乗り気」に変わっている。(“Look.” という台詞からわかる。) 生徒が2人のデート(?)の先行きを心配したのはいうまでもない。

ちなみに、これに続く § 2 の内容から、「Ken はアイヌ文化フェスティバルに Emma は誘ったが Ratna は誘っていない」ということもわかる。これに気づき、指摘してくれたのは生徒の方である。

4. 述べられていない行動や状況を問う

冒頭で述べた「犬に何回エサをやりましたか?」という発問もこれに当たる。

現行版 *NC BOOK 1* の Lesson 4 § 2 では、私は「この本文に抜けている台詞は何ですか?」と問うた。

Ken : Do you see any birds?
Emma : Yes, I do.
Ken : How many birds do you see?
Emma : Just a minute. I see six birds.
Ken : I see some plastic bags too.
Emma : Oh, dear.
(平成18年度版 <i>NC BOOK 1</i> p.37)

この Lesson では、§ 1 で人にものを渡す際の「Here you are.」が初出である。続く § 2 では、Emma が Ken に双眼鏡を手渡していることは（挿絵等から）明らかなのに、この表現が本文には出てこない。本文中で登場人物がどのような動作や行動をしているかを想像させることで、「Here you are.」を用いる必然性を感じさせようと考えた。

班で話し合わせた結果、生徒は上記の空白の行の部分に、Emma の「Here you are.」という台詞が欠けていることに気づくことができた。また、同時にそれに対する Ken の「Thank you.」もあるべきだという意見もあり、それ以降はこの 2 つの台詞をつけ加えて音読練習を行った。

NC BOOK 1 の Do It Talk 4 では、時刻を問う表現の学習が主眼である。一通り状況を確認したあとで、「Paul は本当に待ち合わせ時間に遅れたんでしょうか?」と、少し視点を変える質問を行った。

Paul : Oh, Kumi. I'm late. Sorry.
Kumi : That's OK.
Paul : What time is it now?
Kumi : It's three o'clock.
Paul : What time does the movie start?
Kumi : At 3:15. Let's go.

(平成 18 年度版 NC BOOK 1 p.64)

生徒の意見は、「本人が「I'm late. Sorry.」と認めているんだから遅れている」と「Kumi が「It's three o'clock. (ちょうど 3 時)」と言っているんだから、たぶん待ち合わせびったりで、遅れていない」の 2 つに分かれた。

そこで次の発問である。「もし Paul が時間に遅れていないとしたら、なぜ最初に Kumi に謝ったのでしょうか?」とたずねると、「Kumi に時刻をたずねているので、時計は持っていなかったはず。時間がわからなかったから謝った」「遅れたかどうかわからないけど、Kumi が先にそこにいたのでまず謝った」などという意見が出た。

これらの意見から、最終的に「Paul は時計を持っていなかったので、遅れたかどうかはわからない。時刻に遅れたからではなく、Kumi が先に待ち合わせ場所にいたので、待ち合わせのマナーとして謝っ

たのだろう」という結論に至った。つまり Paul は「遅れていない」可能性が高いのである。小さなことではあるが、本文の状況を詳しく想像したり、マナーについて考えるきっかけとすることができた。

5. 単語や文法から意味を問う

1 年生の本文や詩など、短い文章表現のときこそ、1 つ 1 つの語に込められた気持ちは多く、重い。NC BOOK 1 Let's Read 1 の「What Do You Treasure?」の詩では、まず「Eve さんの宝物の「山」とは、どんな山ですか」と問うことで、第 1 連の「I treasure the mountains.」に注目させた。

定冠詞 the がついていることから、一般的な山ではなく、彼女の故郷、カナダの山であることが読み取れる。また複数形の -s がついているので、当然どこか 1 つの山ではなく、「山々」だということもわかる。彼女の宝物は単なる「山」という訳では収まらない、「カナダの大自然」だろうということになった。

以上のことを考えさせたあとに、今度は「スリランカの Chakila さんの宝物の木はどんな木ですか?」と問うた。「The tree is her treasure.」という表現で、tree が単数形であること、The がついていることなどから、生徒たちは、「彼女にとって特別な 1 本の木」が宝物なのだろうと気づくことができた。また、「そう考えると彼女の書いた絵の中の木が特別なものに見える」と言った生徒の言葉にも豊かな感性が感じられた。

6. おわりに

教科書全ての Lesson のすべての本文で、こうした発問を考え、実践するのは実質難しい。しかし、だからこそ私は、「小さな手がかり」からその場の状況が想像できるような本文に出会ったら、「しめた!」と思う。そして、実際に生徒がその「手がかり」を元に本文の読みを深めてくれたときは、大きな手応えを感じる。

こうした実践の積み重ねにより、生徒は英文の小さな表現にまで気を配るようになり、読解力が高まっていくのではないかと考えている。今後とも、生徒とともに「行間を読む」読解活動に取り組んでいきたい。

Just Now

I はじめに

寝屋川市は現在、英語教育特別推進地域の指定を受け、「英語を通じて、国際社会を主体的かつたくましく生きるために必要な資質や能力の基礎を育成する」を目標とし、全小中学校において「国際コミュニケーション科」を設置している。なお、小学校における年間授業数は、1・2年生は10時間、3・4年生は20時間、5・6年生は35時間である。

II 英語を聞きたくする授業を目指して

「授業だから聞かなければならない」、「英語の学習だから話さなければならぬ」という姿勢で取り組むのではなく、児童たちが「楽しいなあ」「英語をもっと聞きたいなあ」「英語でもっと話したいなあ」と、感じるような授業になるよう心掛けてきた。そして、「友だちや教師との自然なコミュニケーションが生まれ、児童たちは、そのやり取りで英語を身につけていく。そんな授業が生きて、英語学習につながるのではないかと考え、取り組んできた。

III 英語の歌を楽しむ（1・2年生）

低学年は音に対する感覚が敏感で、英語の音声習得には適している時期であり、リズム感覚も優れていることから、歌やチャントを使った活動が適している。この点から、低学年では歌やリズム遊び、ゲームなどの活動を楽しみ、英語への興味・関心を持つよう取り組んでいる。また、言語習得には十分な音声インプットが大切であることから、コミュニケーションを図る態度を育てるために、たくさん英語を聞く音声インプットを中心としたレッスンプランを立てている。

豊かなコミュニケーション能力を育てる英語活動の実践

岡本博子 Okamoto Hiroko
清水麻未 Shimizu Mami
(大阪府寝屋川市立桜小学校)

歌の導入では、まずCDを使い、ネイティブ・スピーカーの英語を聞かせる。振り付けがある場合は、歌を流しながらお手本を見せる。児童たちに絵や物を見せたり描いたりして、単語の意味や歌の内容を紹介し、歌に興味を持たせる。

次に、児童たちも一緒にリズムに乗って身体を動かす。この時、リズムをゆっくりにし、わかるところから口ずさむように指導する。そして、何度も同じ歌を取り上げ、児童たちが楽しんで歌えるようになるまで練習する。児童たちがプレッシャーなく歌えるようになれば、クラスを2つに分け、掛け合いで歌う。そして次にペアになり、掛け合いで歌う。

このようにして歌を通してコミュニケーション活動ができるよう取り組んでいる。

IV コミュニケーションを楽しむ（3・4年生）

中学年では先の音声インプットに加え、友だちとの関わりを大切にし、積極的にコミュニケーションが図れる活動をめざしている。普段はあまり話さない、一緒に遊ばない友だちとも英語を通して関われるように工夫をしている。

パートナーを見つけ、お互いに「How are you?」と聞く活動をし、そのあとにジャンケンをしてコインを集めるというシンプルなゲーム「ジャンケンコインゲーム」を通して、児童たちはたくさんの友だちとのコミュニケーションを楽しんでいる。

ゲームの前にたくさんの友だちと会話をするこゝと、日本語は使わないこと、アイコンタクトを取ることなどのルールを確認することで、友だちと笑顔でアイコンタクトを取りながら活動ができていく。

普段は友だちに体の調子を聞くことはあまりないが、英語を使うことで、自然とコミュニケーション活動になるところが英語活動のメリットと言える。

V 英語でクラフト・英語で作品交流 (5年生)

「服」の単元では、今まで習った英語を使いながら、「オリジナルの服を着た人形作り」を行った。そして単元の最後に、自分の作った人形を使ったコミュニケーション活動を行った。

【授業のながれ】

① 服の英語を知ろう

・絵カードを見ながら発音練習し、意味を知る。(カルタゲームなどをする。)

② 服クイズに答えよう

・たくさんの民族衣装を着た人たちの写真の中から、ALTの“*She is wearing a white shirt.*” “*He is wearing green pants.*”などを聞き取り、どの絵のことを言っているのかを当てる。また、その人はどこの国の出身なのかも当てる。

③ オリジナルの服を着た人形を作ろう

・“*T-shirt, please.*” “*I want two red hearts.*”などの表現を使い、自分の人形に着せたい服や、服に付けたい模様の材料を取りに行き、オリジナルの服を着た人形を完成させる。

④ 英語で人形の服を説明しよう

・自分が作った人形を1つ持ち、人形になりかわり、出会った友だちに“*I'm wearing a red skirt.*”と、人形の着ている服を紹介する。紹介し終わったら人形を交換し、次の友だちを探す。

⑤ 英語でほめよう

・自分が作った人形を持ち、2人組になってお互いの人形をほめ合う。“*I like your green shirt.*”
※言うことがなくなったら、服以外のことでもほめていいことにした。“*I like your long hair.*”など、たくさんほめ続けられた方が勝ちにした。

VI 英語でクイズ大会・英語でクッキング (6年生)

「料理」の単元では、ゲームを通して児童たちどうして料理の作り方を説明したり、聞き取ったりしながら、料理に必要な英語を学習した。そして単元の最後に、実際に英語で作り方を聞き取りながら料理に挑戦した。

料理を楽しみながら英語に触れることで、「聞き取りたい」という思いを高めていけるように考えた。

【授業のながれ】

① 料理に使う英語を知ろう

・*Are you hungry?*の歌を歌う。(歌にあわせて、歌に出てくる単語の絵カードを指しながら、食べ物の言い方を学習する。)
・絵カードを見て、料理の仕方と味の言い方の学習をする。

② 料理の作り方クイズを作ろう

・“*Onion, please.*” “*I want a potato.*”などの表現を使い、自分たちのほしい材料のカードを取りに行き、グループで好きな料理のレシピを完成させ、発表練習をする。(好きな料理の作り方を英語で言えるように、並べたカードを見ながら練習する。)

③ 料理の作り方クイズをグループで発表しよう

・クイズを解くために、“*Is it hot?*” “*Yes.*” “*Is it a Japanese food?*” “*No.*”などの表現を使い、クイズを解くヒントにするためのやり取りをする。

④ ALTと英語でクッキング「スコーン作り」

・今まで習った料理に必要な物の名前や料理の仕方を聞き取りながら、スコーンを作る。
・“*Put on your apron.*”など、身支度を整えるところから英語で行う。次に、グループのメンバーが順番に“*I want a ~.*”のフレーズを使って材料を取りに行く。準備が整ったら、料理の一工程ずつを英語だけで説明してもらい、それを聞き取りながら作っていく。

※教室の前で料理の見本をやって見せないで、ALTの英語だけで授業を進めるようにした。

VII おわりに

これらの「英語を聞きたくなる授業」の取り組みの中で、児童たちは確実に変わってきている。一番の変化は、知っている単語を手がかりにして何とか英語を聞き取ろうとする姿勢が出てきたことである。特に6年生では、「ALTの英語を自分の力で少しでも聞き取れたことが、英語学習の意欲につながっている」という感想が見られ、うれしく思っている。これらの取り組みで得た英語に対する自信を力に、これからも意欲的に学習してほしいと願っている。

英語教師の リソース

RESOURCES FOR
ENGLISH TEACHERS

DVDを活用しよう

—キング牧師、公民権運動、非暴力の心—

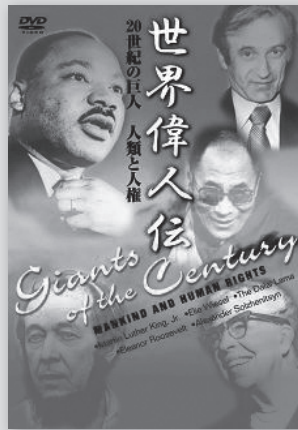
田嶋美砂子 Tajima Misako
(星美学園中学高等学校)

昨今のリテラシー研究において、言語だけを意味の産出方法と捉えることは少なくなってきました。言語と同様に、視覚的表象の重要性にも注意が払われ、multimodality や transmodality などの概念が生まれています。

言語教育の教材についても同じことがいえるのではないのでしょうか。教科書の本文やCDの音声とともに、絵や写真、映像などの視覚教材を活用することが、ことばや文化、そして、国内外の出来事に対する生徒たちの興味・関心を高める一助となるように思います。そこで今日は、NEW CROWN で好評を得ている題材、キング牧師についてより深く理解するためのDVDを紹介いたします。

1996年にフランスで制作された『世界偉人伝 20世紀の巨人 人類と人権』です。このDVDは、キング牧師以外にもエレノア・ルーズベルトやダライ・ラマなどの活動に触れ、20世紀に世界各地で起こった人権獲得のための闘争を時系列的に53分の映像でまとめています。そのため、キング牧師に直接関連する部分は8分程度と大変短いのですが、歴史上の出来事はそれぞれ単独で起こっているのではなく、互いに密接な関係にあること、それらはすべて解決したわけではなく、今を生きる私たちの課題でもあることを伝える作品となっています。以上のような点を重視すると、このDVDは、人権とそれを揺るがす民族紛争や戦争の愚かさについて深く考えるためのpost-reading教材として活用することができそうです。

一方、キング牧師に直接関連する部分だけをpre-reading教材やwhile-reading教材として利用することも可能です。例えば、白人の秘密結社、



『世界偉人伝 20世紀の巨人 人類と人権』

発売元：
株式会社アイ・ウィー・シー ¥2,675 (税込)
※キング牧師に関する映像は、冒頭から約25分後に始まります。

クー・クラックス・クランが黒人を虐待する場面や警察が権力を行使して黒人デモを鎮圧する場面を通じ、彼ら・彼女らが置かれていた当時の過酷な社会的背景を理解することができます。また、“I Have a Dream”の演説以外にキング牧師が民衆に語りかける場面やワシントン大行進のために人々がバスで移動する場面は、本文の読解過程において、有効な補助的役割を担うでしょう。さらに、“I Have a Dream”の演説場面では、音声だけを聴くときとは違い、キング牧師の身体の動きや期待に満ちた聴衆の表情を見ることができます。視覚教材ならではの醍醐味です。

さて、日本語に翻訳されているDVDであっても、それを利用する際は、内容に関する穴埋めプリントなどを準備し、生徒たちが意欲的に視聴することのできる環境を作りたいものです。主な人物や団体、場所の名称など、単語レベルで構いません。また、演説場面は、日本語の字幕を参考にしながら、英語の聴き取りに挑戦させるよい機会となります。穴埋めプリントとともに、教科書で出てきた比較的平易な語や句(例えば、dream, one day, togetherなど)を虫食いにしたスクリプトを用意すると、生徒たちも自信を持って取り組むことができると思います。

約8分の映像は、キング牧師の死で終わります。非暴力を訴え続けたキング牧師が最悪の暴力の1つである暗殺によって最期を迎えたのは、本当に悲しく、残念なことです。しかし、彼の遺志はさまざまな人々に受け継がれています。NEW CROWNで英語を学んでいる生徒たちにも、あらゆる形の暴力を否定する心が育つことを願っています。

英語語彙学習を総合的にサポート

2008年秋に刊行された『エースクラウン英和辞典』は、編者にコーパス言語学の第一人者で、現在はNHK教育で放映中の「コーパス100!で英会話」の講師をされている投野由紀夫先生を迎え、高校初級向けの学習辞書としては新しい“基礎学習のやり直しをサポートする”というコンセプトの元に誕生しました。

最新のコーパス分析によると、ネイティブスピーカーの英語の特徴として、使用頻度が高いトップ100語は話し言葉の約7割、トップ2000語は書き言葉の約8割、話し言葉の約9割を占めるという結果が出ました。つまり、英単語は「一部の使用頻度の高い単語」と「それ以外の膨大な数の頻度の低い単語」の2種類に分けることができます。生徒の基礎語彙力を効果的に伸ばすには、この「一部の使用頻度の高い単語」を徹底させることが重要だといえます。

『エースクラウン英和辞典』ではこの「一部の使用頻度の高い単語」のトップ100語の中でも生徒が必ず身につけておくべき最重要語を、フォーカスページという特集ページ(下図参照)で徹底的に分析しています。また、



トップ2000語を重要語として赤い大きな見出しで見つけやすく表示し、「それ以外の膨大な数の頻度の低い単語」も学習に必要な語を厳選して収録しています。

フォーカスページ

最重要語は生徒に何度も繰り返し学習して使いこなせるようになってほしい単語です。この辞書の特長の1つであるフォーカスページは、コーパスを駆使してよく使うフレーズ・構文などを、コラム形式の見やすいレイアウトで特集しています。

コラムの1つ「使えるコーパスフレーズ」は、コーパス分析をしてその単語の最も重要なフレーズを頻度順に紹介しています。goのフォーカスページ内にはgo to + 名詞とgo + 形容詞・副詞を載せていますが、go to + 名詞で使用頻度の高いものはgo to bed, 次いでgo to school, go to sleep, go to work, go to churchと続くことがひと目でわかります。

その他にも、単語の中心的意味をイラストとキーワードで表す「共通イメージ」、ネイティブスピーカーが日常会話で使用する自然な表現を紹介する「ネイティブはこういう!」、構文の使用頻度をランキングにした「コーパス この順番でマスター」、単語が高校の英語教科書の中で具体的にどのように使われているかを示した「教科書フレーズ」など、さまざまな観点から単語を分析しています。

英語力のミニマム・エッ



エースクラウン英和辞典

投野由紀夫 編
2,835円(税込)

センシャルを凝縮したこのフォーカスページの内容を優先的に学習するように指導すると、生徒の語彙力を伸ばすのに効果的でしょう。

カラーページ

96ページにもよる巻頭カラーページも、この辞書の大きな特長の1つです。生徒にとって身近な学校やファッションを、ピクチャーディクショナリーのように示した「ピクチャーページ」、世界の言語や文化を地図で表した「カルチャーページ」、読む・書く・聞く・話すの4スキルのコツを丁寧に説明した「4スキルページ」、そして中学・高校で学習する文法を、できるだけ文法用語を使わずに平易な言葉で説明した「基礎文法」の4カテゴリーから構成されています。この巻頭カラーページだけで英語百科事典の役割を果たしているといっても過言ではありません。

『エースクラウン英和辞典』は高校初級向けの英和辞典ですが、基礎英語のやり直しをコンセプトに編集された辞書ですので、中学生からでも十分にお使いいただけますし、実際に多くのご採用をいただいております。ぜひお手にとってご覧ください。

(外国語辞書編集部)

TEACHING ENGLISH NOW

16号

2009年
9月1日発行
定価80円
(本体76円)

編集・発行人：八幡統厚
発行所：株式会社三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話 (03)3230-9422(編集)
振替 東京 00160-5-54300
[NEW CROWN ホームページ]

http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html

印刷：三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9
電話 (0426)45-6111(代)

編集後記

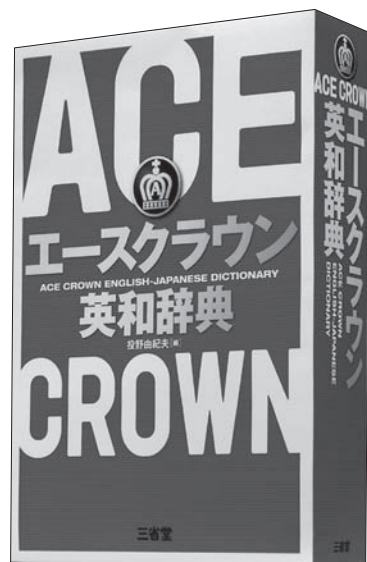
三省堂は、Web「三省堂英語教科書・教材 SANSEIDO ENGLISH」(URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>)にて、今後も、授業をサポートする資料(年間指導計画表、ワークシートなど)や英語教育に関する情報(コラム、研究会情報など)を掲載していきます。

基礎からやり直す、英語を楽しむ。
学習英和のエース、新登場!

エースクラウン

ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

英和辞典



投野由紀夫 [編]

定価: 2,835円

総頁: 1,888頁(巻頭カラー96頁を含む)

判型: B6変型判

収録項目数: 英和 約50,000, 和英 約23,000

カナ発音付き, 2色刷

巻頭カラー
96ページ!

中学の復習ができる
「学習ページ」

コーパスを駆使!

最重要語を
徹底解説する
「フォーカスページ」

和英総項目
2万3千!

類書中最大の
「和英小辞典」
付き

語法・受験に強い!
現代英語に強い!

WISDOM

しかも、進化するウェブ辞書が無料で使える!

ウェブ版英和は全見出し語にネイティブの音声付き。また、英和・和英ともに、教材作成・英作文に便利な新ツール「用例コーパス」を装備(一般公開中)。詳しくは、<http://www.dual-d.net/> へ。

ウィズダム英和辞典 第2版

井上永幸・赤野一郎 [編]

[並装] 3,465円(税込)

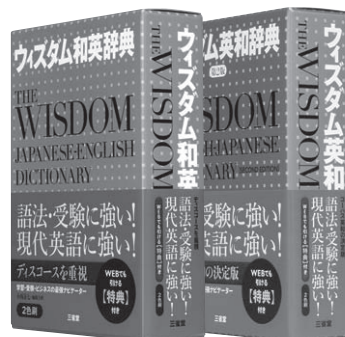
[革装] 5,250円(税込)

ウィズダム和英辞典

小西友七 [編修主幹]

[並装] 3,465円(税込)

[革装] 5,460円(税込)



対話流 未来を生み出すコミュニケーション

清宮普美代・北川達夫 [著]

1,575 円 (税込) 四六判 224 ページ ISBN 978-4-385-36437-7

「闘うコミュニケーション」はもう古い。「学び合う集団」の創造に不可欠なのは、同調でも対立でもない“対話”の発想。学校と企業において学習環境の再設計を提唱、実践する2人のプロが織りなす、変革と多様化の時代の対話論。2009年7月刊。



ニッポンには対話がない

学びとコミュニケーションの再生

北川達夫・平田オリザ [著]

1,575 円 (税込) 四六判 216 ページ ISBN 978-4-385-36371-4

品格や武士道精神よりも、いま日本社会に必要なのは「対話力」。「違い」を前提として互いの考えをすり合わせていく対話型コミュニケーションを、地域社会や学校教育の場に組み込んでいく。各方面から高い評価を得た教育と社会の再生論。2008年4月刊。



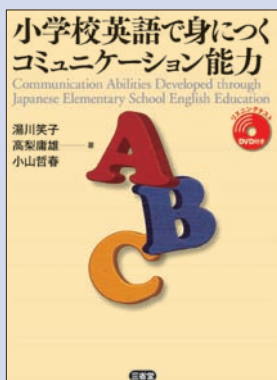
教授のおいしい英会話

— アメリカ編 —

霜崎實・ジョージ・ドウ [共著]

1,890 円 (税込) 四六変型判 192 ページ ISBN 978-4-385-36413-1

NHK ラジオ講座「英会話入門」の3ヶ月間のコースを速習2週間!で学べるようにコンパクトにまとめた英会話独習書。付属のCDを使った反復練習で、英語表現のコツと英語のリズムを体得。音声CD2枚付き。



小学校英語で身につくコミュニケーション能力

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春 [著]

2,625 円 (税込) A5判 212 ページ ISBN 978-4-385-36401-8

小学校英語で児童が身につけた「コミュニケーション能力」とは? 外国語活動が必修化された今、児童・教師を対象にした調査を通してこれまでの成果を検証し、今後の展開の可能性を探る。リスニングテストDVD付き。

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□本社 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

□大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177

□名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F TEL. 052 (252) 9211・9212

□九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532

□札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 2F TEL. 011 (616) 8722